

# 芭蕉と誓子

—「取り合わせ」を中心に—

小瀬 渺 美

山口誓子は、昭和三十八年、『芭蕉秀句』の中で、

俳句の世界に入って日なお浅く芭蕉の句に親しまなかったら、私は「岩にしみ入る」を荒唐無稽の表現とし、この句を月並の句と思っていた。年少未熟の者は度しがたい。詩体験やや深まるに及んで、この蝉の声は、たしかに岩にしみ入り、しみ透る。声もまた岩を透すと感ずるようになった。

(『芭蕉秀句』)

と述べ、初学の頃、「閑さや」の句が荒唐無稽の表現・月並の句であると思ひ、芭蕉理解が浅かったことを回想的に反省のことばで述べ、格別に芭蕉に理解を示していたわけではなかったことを語っている。

この誓子が、芭蕉に直接関心を深めてゆくのは、芭蕉の紀行文

中の発句を見直した「芭蕉についての感想」(『古典研究』昭和十二年八月)や、「芭蕉に親しまうとする者は、その作品や、他の文章を見ただけではいけません。この『嵯峨日記』をこそ読むべきです。」と語った「嵯峨日記」(JOCK「夏季青年読書講座」昭和十二年七月二十七日)あたりからであろう。

そして、芭蕉の書簡に直接触れる機会となったのは、昭和十五年九月、箱根に在ったころ、Y氏に芭蕉書簡二通を見せられたことに始まり、「芭蕉の書簡をほんたうによく読んでみようと思ひ立つ」て、「真偽」(「馬酔木」昭和十七年三月)など、芭蕉書簡についての文章を書くようになった。

こうして誓子は、芭蕉への関心を高め、芭蕉の発句、俳文への理解を深めてゆくのであるが、その理解は近代俳句の実作者としての立場からの芭蕉見直しであり、芭蕉の俳文の中に断片的にみ

られることばから、実作者としての指標とすべきことばを発掘してゆくのである。

山口誓子は、昭和六十二年六月、芸術院賞受賞記念講演で、「芭蕉の言葉」と題して講演した。

誓子のこの講演は、俳句の素材・写生・感動・取り合わせ・表現・子規を通った芭蕉などについて論じたものであったが、本稿では「取り合わせ」ということを中心に、芭蕉と誓子との俳句に關する考え方の系譜を考えてみたいと思う。

講演の中で、誓子は「取り合わせ」について芭蕉のことばとして

感るもの動くやいなや句となるべし。(「三冊子」)

発句は物を合すれば出来るなり。(「去来抄」)

発句は取合すものと知るべし。(「三冊子」)

発句は取合するもの也。(「旅寝論」)

物をむすぶ。(「旅寝論」)

などといったことばを挙げている。これはいずれも「去来抄」「三冊子」「旅寝論」からの引用である。

誓子はこれらのことばから、俳句の実作において、素材の取り

合わせの重要さを説いているわけである。

ところで、芭蕉が「取り合わせ」ということばをみせるのは、おそらく寛文十二年(一六七二)の「貝おほひ」にみられるのが最初であろう。「貝おほひ」では、「取り合せ」の語は、

四番

左

信乗母

さかる猫は気の毒たんとまた、びや

右勝

和正

妻恋のおもひや猫のらうさいけ

の判詞の中で

〈略〉右又「猫のらうさい」と。いふ哥を。妻恋にとりあはされたるは。よい作にや

ということばがみられ、また、同じ「貝おほひ」の中で

左勝

政輝

鹿をしもうたばや小野が手鉄炮

右 宗房

女をと鹿や毛に毛がそろふて毛むつかし

という「二十番」について、左の句を勝とした判断した理由として、

左の発句。小野と。いふより。鹿と。つゞけられ侍るは。かの紫の。しなもの。ひかる。お源の物語にも。小野に鹿のけしきを。書つらね侍しより。尤能とりあはされたる成べしへ略。

といった判詞がみられる。

これらはいずれも寛文十二年春の句合せ「貝おほひ」の判詞である。「貝おほひ」は一名「三十番俳諧合」とも称される句合せで、

寛文十二年正月二十五日、伊賀上野松尾氏宗房釣月軒にしてみづから序す

とあるように、菅原道真の七百七十回忌の日に天満宮に奉納したものと云われるが、その判詞には、流行の小唄のことばや俗語などを自在に駆使して、軽妙、奔放なことばをみせている。

前者は、右句の

妻恋のおもひや猫のらうさいす

を勝ちと判定した理由のひとつとして「猫のらうさいす」という珍しい小唄を妻恋に「とりあはされた」ことを「よい作にや。きんにや。うにや。」と小唄の合の手と思われることばを用いて述べられたものである。ここでは「妻恋」と恋患いとされる「らうさいけ」との取り合わせを可としているのである。

また後者は、

鹿をしもうたばや小野が手鉄炮

の句をよしとする理由として「小野」と「鹿」とを続けたことは、「源氏物語」夕霧の巻にもみられるところであり、これを「能とりあはされたる成るべし」と評しているわけである。この作の場合は、「取り合わせ」そのものの巧拙というよりは、ことばの続き方の巧拙に触れたことばとみるべきであろう。

次に挙げられるのは、貞享三年（一六八六）の年頭に成ったとみられる「初懐紙評注」の一部である。

鴉の一声夕日を月に改めて

文鱗

の句について

（略）「夕日淋しき鴉の一声」と長嘯のよめるに、西行の「柴

の戸に入日の影をあらためて」と読る月を取合せて一句を仕立  
たる也。

と述べている。この「初懐紙評注」は、貞享三年歳首に成った其  
角の「日の春をさすがに鶴の歩みかな」以下、芭蕉と江戸蕉門の  
百韻一巻の前半五十韻に芭蕉が評注を加えたものであるが、ここ  
で触れている「取合せ」は、文鱗の

鴟の一声夕日を月に改めて

という句は、木下長嘯子の

のべみれば尾花が末に打ちなびく夕日もうすしもずの一こゑ

(「挙白集」)

という歌と、西行の

入日の影かくれけるままに、

月の窓にさしいりければ、

さしきつる窓の入日をあらためて光をかぶる夕月夜かな

(「山家集」)

という二首の「もずの一こゑ」と「入日をあらためて」「夕」の  
語とを「取合せ」て一句を仕立てたのだとしているわけである。

「三冊子(わすれみづ)」では、

「発句の事は、行て帰る心の味也」「先師も「発句はとり合物

と知るべし』と語るよし、或俳書にも侍る也」  
と述べている。これは

山里は萬歳遅し梅の花

の句について、「山里は萬歳遅し」ということだけでは平句の格  
であって、発句の格を備えた句とは言えない。しかし、これに「梅  
の花」と取り合わせて付けたところが発句の格の条件であるとい  
うのである。

それを先師芭蕉が「発句はとり合物と知るべし」ということば  
で説明しているわけである。なお、ここでいう「或俳書にも侍る  
也」というのは、許六の「宇陀法師」(元禄十五年刊か)に芭蕉  
のことばとして、

師説云、惣別発句は取合物と知るべし

と述べていることを指しているものである。山里に来る萬歳が遅  
いということと、全く異質な梅の花との結合に発句の格を示した  
ということになる。

「去来抄」には、

先師曰、「ほ句は物を合すれば出来せり。其能取合するを上手  
をいひ、悪敷を下手といふ。」許六曰、「ホ句は取合せ物也。」

先師曰。是ほど仕よきことのあるを人はしらず、と也。」去来

曰、「物を取合て作する時は、句多く吟速也。初学の人、是を思ふべし。功成に及では、取合、あわざるの論にあらざらぬ。

という取り合わせについての芭蕉のことばに対する、去来・許六の対応をみることが出来る。

まず芭蕉のことばは、発句は物を取り合わせることによって成り立つものであり、その取り合わせの巧みなことを上手といい、取り合わせの悪いものを下手というのだと言っている。これを受けて許六も「ホ句は取合せ物」であり、芭蕉が取り合わせほど容易に発句が出来る方法を一般には理解していないと言ったという点について述べているのである。

その芭蕉と許六の応答に対して去来は、初心の人は物を取り合わせて作句をすることによって多作と速吟が可能であることを心すべきである、と賛意を表するとともに、巧者即ち俳諧の上手といわれるような人は、最後まで取り合わせ拘泥する必要はなく、取り合わせをどうかという問題は、もはや論外であるといふのである。従って去来の考えは取り合わせが特に必要なのは初心者であるとしているわけである。

これらの論とかかわりのある説として、許六が「篇突」（元禄十一年刊）の中で

師ノ云、発句はとり合せ物也、二ツとり合て、よくとりはやすを上手と云也といへり。有難おしへ成べし。

と書き残している。ここでは、「発句はとり合物」であると、芭蕉の説くところを「有難おしへ」と受けとめている。

三者の説くところに、多少のニュアンスの差はあるが、ともかく芭蕉の発言である、発句は、二つの物を取り合わせることによって成り立つという主張に対しては、去来、許六ともに、共通の理解があることを知ることができる。

さて、「取り合わせ」にかかわる誓子自身の俳句理論として述べたもののうち、比較的早い時機のものとして挙げられるのは、昭和十二年の

(1) 作者の主観によって現実を構成する。

(2) 現実とは作者の主観を規定する。

つまり、作者の主観と現実とが、相互関係に於て緊密に結びついてゐるといふこと——之が写生構成主義の根本理論である。といった発言であろう。

「現実が作者の主観を規定」し、作者は「主観によって現実を構成する」ような作者の主観と現実との緊密な結びつきを「写生構成の根本理論」とするもので、誓子俳論の根幹をなす俳論が、

昭和十二年、すでに明確な形で述べられているわけである。

この「写生構成」の論は、その後さらに具体的な形でくりかえし誓子の文章の中に表れてくる。

戦後昭和二十三年一月、誓子中心の俳誌「天狼」が創刊されるが、昭和三十一年その「天狼」の「鏡」という文章の冒頭に次のような一節がある。

私の作句方法は、「物」から入って、その内部の、眼に見えざる関係を捉へ、引り返すときに、又「物」から出て来るのである。はじめの「物」は現実存在の「物」であるが、あとの「物」は「物」に内在するものを担って、言葉として出て来た「物」である。本質存在の「物」である。この二つの「物」は、同じく「物」と云っても、お互ひに別のものである。

これは、誓子の作句方法を具体的に述べたもので、ここでは、俳句は「物」から入って「物」から出て来るとして、現実に存在する「物」と言葉として表現された「物」との関係を、「現実存在の内面に潜り入って、そのやうな本質存在となって作品に立ち戻ることを念願してゐるのである」と述べている。

これが、作者の主観と現実との緊密な結びつき——写生構成——

についての基本的な考え方ということになるのである。

誓子が芭蕉について語ったものは多いが、『芭蕉秀句』の中で、芭蕉の

毛衣につゝみてぬくし鴨の足

に触れて、取り合せについて述べている。いさゝか長いが引用する。

芭蕉は、発句は物と物との取合せだと教えていたが、物の上に成り立つ句もある。

毛衣につゝみてぬくし鴨の足

などはその例である。

しかしこの場合も、「鴨の足」と「毛衣」との取合せと言えぬこともない。他に対して取り合わせる場合もあり、みずからに即して取り合わせる場合もあるなどと書いてある。この議論は現在でも蒸しかえされることがある。

私は俳句の性格を物と物との関わり、関係づけにありと主張している。(略)

その場合、一物の上に成り立つと言っても、一物の中に屈折があつて、一物の中にも物と物が分かれ、その物と物とが関わりあうことがある。

芭蕉のこの句では、「毛衣」と「鴨の足」との関わりである。

ここで誓子の俳論として重要なことばは

私は俳句の性格を物と物との関わり、関係づけにありと主張している。

ということであり、『芭蕉秀句』では、このことばにつづいて記されている、

「去来抄」の「発句は物を合すれば出来るなり」——俳句の性格

「三冊子」の「物に入ってその微の顕て情感るや、句となる」——実相観入

同書の「内をつねに勤て物に応ずればその心のいろ句となる」——心の形象化

といった、この一節の最後のことばであろう。そこに誓子俳論の基盤とも言うべき、物と物との関わり、関係づけ、すなわち物と物との取り合わせによって句が成立するとする考え方の根底にあり、それは芭蕉の考え方を、「去来抄」「三冊子」を通して、誓

子が受けとめているということになるわけである。

誓子は、昭和三十八年に、

俳句では昔から「取り合わせ」「配合」ということがいわれている。それは俳句の性格だからである。

私はそれを「物と物との照応」（照らしあわせ）といったり、「物と物との衝撃」（ぶつかりあい）といったりする。（「物」は、ここでは広く事物を含めての「物」である）物と物とがただあるのではない。その物と物とが照らしあわしているという相互関係が必要なのだ。その物と物とがぶつかりあって、火花を散らさなければならぬのだ。そこが短歌とちがうところである。

と発言している。

ここでは「取り合わせ」「配合」が俳句の性格であり、誓子はその「取り合わせ」「配合」を「物と物との照応」「物と物との衝撃」ととらえ、「その物と物とがぶつかりあって、火花を散らさなければならぬ」としているわけで、それはさらに「俳句にあっても『物』と『物』とはお互いにそういう懸け隔ったものであってほしい。すれば衝撃が強くなり、火花は激しく散る」と展開

されているのである。

この考え方は、誓子の中では、さらに的確な形となり、昭和四十五年には、

芭蕉は発句は「取合せもの也」と云ったが、この「取合せ」は自然の物と物とを関係において捉えることである。私はこの点を俳句の性格と観念して、俳句は自然の物と物とを関係において詠ふ詩とも定義するのだ。

感動は一であるが、関係において詠はれた自然の物と物とは二である。その物と物とは懸け離れてゐる方がよい。二つの物は互ひに矛盾してゐるやうに見えて然も統一されてゐるのがよい。俳句はさういふ矛盾の統一を詠ふ詩であると云つてもよい。

ここでは、俳句を「自然の物と物とを関係において「詠ふ詩」と定義し、「取合せ」は「自然の物と物とは二である」が、その二物は「懸け離れてゐる方がよく、この懸け離れた二物が統一されて詠われるところに、俳句の特性を見出しているわけである。そしてこの「懸け離れてゐる方がよい」という発想から、今回の記念講演の中では、芭蕉の「旅寝論」の中の  
さびしき物にさびしからぬ物を結ぶ

ということばに触れて、

「さびしい物」と「さびしい物」を組み合わせたのでは、衝撃、ぶつかり合いが弱いんですね。ですから、さびしい物とさびしくない物とを結ぶと、ぶつかり合いが強い、そういう物を詠え、というわけです。

(記念講演)

という形で展開されたわけである。

この「取り合わせ」について、誓子は「関係づけ」ということばを用い、

配合というのは新しい言葉ですけれども、芭蕉時代には二つのものを取り合わせると申しました。私はもっとハイカラな言葉で「関係づけ」と言っています。

(記念講演)

私は俳句の本質は、この配合、取り合わせだと思います。芭蕉の昔から俳句は取り合わせるものだ、言いましたが、この本質はいまも変わらないのであります。俳句は、「二つのものを関係づける詩」であります。

(記念講演)



と発言している。ここでは「取り合わせ」「配合」「関係づけ」を略同義語として用い、俳句を「二つのものを関係づける詩」であるとの考えを示しているわけである。

このことを、具体的な俳句作者の立場として、記念講演の中で、芭蕉の

物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。

という「三冊子」のことに注目し、これを

「物の見えたるひかり」と言うのは、感動のイメージということですね。そのイメージは、まだ消えないうちに言葉で言いつめる、言葉に定着せよ。これを別のことばで問題にしますと、「取り合わせ」は物と物との結びつきである。それを物を物として表現せよ、ということですね。今ではそれを客観描写と言いますね。客観描写をせよ、と言っているわけです。

と説き、感動のイメージを消えないうちに言葉に定着させることは、物を物として表現することであり、それは、言うところの「客観描写」をせよと言うことであると受けとめているのである。

さらに、その「二つの物を関係づける」ことにかかわることばとして、「想像力について」と題する文章の中で、ゲーテのことばを引きながら、

これはたいへんおもしろいことだと思いますが、「芸術家は自然に対して二種の態度をとる。彼は支配者であると同時に下僕である。」この下僕ということをはかの言葉でいいますと、自然に即するということです。ひたすら自然に従うことです。これに反しまして支配者ということは、つまりさっきから申しております想像力を働かすということです。だから下僕であって支配者であって、支配者であるということは、現実に即しながら、現実そのままではなく、現実を離れる。こういうことでもあります。私はこの即することを写生、離れることを構成と申します。私はみずからの主義を写生構成と呼び、これを古くから唱えて参りました。

と自己の作句態度を明確にしている。

この発言は、整理してみると、

○自然に即する態度

——写生

○ 現実を離れて想像力を働かすこと——構成

ということになり、これが俳句に対する誓子の基本的な姿勢であり、句作の基盤であるということになるわけである。

以上のような点が「取り合わせ」に関わる誓子の俳論の展開であるが、誓子は先の講演の中で、子規に始まる近代俳句の方向に触れている。これは「子規を通った芭蕉」という一節であるが、そこで次のように語っている。

子規が芭蕉の句、就中「猿蓑」を非常に勉強しました。それから芭蕉の言葉を検討しまして、その結論として、芭蕉の俳句は三つにまとめることが出来る。

ひとつは、写生、それから取り合わせ、子規は「取り合わせ」を「配合」と言いました。それからもうひとつは、客観描写。

芭蕉俳句は、この「写生」「配合」「客観描写」の三つに分類しております。

これが、芭蕉俳句の神髄である。そういうことをはっきり言っておいたわけです。

と、「写生」「配合」「客観描写」の三つを子規の分類した芭蕉

俳句の神髄であるとしている。そしてこの子規の継承者としての高浜虚子、河東碧梧桐を挙げ、

その三つの中で、弟子の高浜虚子は、写生と客観描写を結びつけて指導しましたね。それから子規の弟子の碧梧桐は、配合と写生を結びつけて唱導しました。配合は物と物との取り合わせをすると、くり返しになる。それがくり返しにならない為には、絶えず写生をして、新しい物を見つけて、新しい取り合わせをしよう、ですから、子規の三つの主張のうちで、門人の虚子と碧梧桐は、力の入れ方が少しちがっていたわけです。

と述べて両者の違いを指摘し、子規の「写生」「配合」「客観描写」という特質を、子規を継承するしかたとして、虚子と碧梧桐は、

虚子——写生・客観描写

碧梧桐——写生・配合

という形で受けとめたという見解を示しているわけである。

これに対して、実作者としての誓子は、

私はその虚子と碧梧桐、それを全部受け継ぎました。

私は写生・配合・客観描写、それをしっかり守って、私の俳句は、私に言わせれば、芭蕉からずっと伝わった俳句そのままのものです。

と、自覚的に誓子自身の考え方を示しているわけである。

誓子の俳句についての考え方を見直してみると、表現の技法として「写生」ということを出発点として、それが「客観写生」と「物と物との衝撃」をさせるという方法に、近代俳句の新しい方向を拓こうと試みているということになる。

このことは、誓子が、芭蕉の俳論を「去来抄」「三冊子」「旅

寝論」などの中にもみられる、芭蕉のことを「写生」「配合」「客観描写」という形で、実作者として厳しく受けとめ、その中から「取り合わせ」に注目し、これを誓子としては、現代俳句の先達として実践的に作品面に実現してゆこうとする立場を守ろうとしているということであろう。そこに誓子の芭蕉受容の志向をみる事が出来る。

そして誓子は、虚子と碧梧桐が子規を受けとめた方法のちがいが、即ち、虚子は写生と客観描写という面で子規を継承し、碧梧桐は写生と配合という立場で子規を受けとめたとして、これに対して誓子自身は、子規の持っていた、写生、客観描写、配合という、すべての面を受け継いだと自覚的に述べたのである。